自分のことを誰も知らない世界で自らの力を試してほしい

「京大力、新輝点。」これは2022年の創立125周年に向けて京都大学が掲げる新たなスローガンです。人文・社会科学から自然科学分野に至るまで、他を圧倒する独創的な研究力で世界をリードしてきた京都大学。その射程は来るべき人類の未来にまで及んでいます。次の時代を切り拓くために、私たちは、そして大学はどうあるべきなのか。京都大学第26代総長の山極壽一先生にお話を伺いました。

京都大学総長
山極 壽一先生

——「おもろチャレンジ」に注目が集まっています。

私は京都大学の総長に就任するにあたって「WINDOW構想」を打ち立てました。世界や社会に通じた窓を開け風通しをよくし、野生的で賢い学生を育てる。そのための6つの目標の頭文字をとったもので、最初の「W」が「Wild and Wise」です（本誌132ページからの『京都大学』記事を参照）。

京大生はもともとワイズ（賢明）だと思いますが、そこに野生（ワイルド）が加われば、とてもクリエイティブな人材になるでしょう。ワイルドさを発揮するためには、まず世界を見なければならない。それも、他人のお膳立てによって世界を見るのではなくて、自ら窓を開けて自分の力で見る。自分の力を試してみる。あるいは、誰も自分のことを知らない世界に行って、「自分が世界の人々からどう見られているのか」を試してほしい。

——まさに自分自身と向き合う「異文化体験」の原点ですね。

初めのうちは企画をしたことが全然実現しなかったり、挫折したりということを経て、なんとか実現させて日本に戻ってくる。彼らの体験を聞くと、とても面白いエピソードがたくさんありますね。

やはり、「おもろい」ということが重要。学部生にとっては、まだ学問的な高みを目指すところまで行かなくてもいい。「おもろい」という精神をもって海外へ飛び出すことが大切だ、ということです。

——「おもろい」というのは、先生の数多い著書の中でも重要なキーワードとなっています。

うん、「おもろい」というのはその発想が新しくて、「君にもおもろいかもしれないけれど、私にもおもろい。だから、私はそのおもろいという君の『発想』を支えるよ」、と言ってもらえるということです。だから「おもろいな」と言った先には「ほな、やってみなはれ」という言葉が続くんですよ。それが関西の「おもろい」という思想で、いわばダイアローグ（対話）なのです。

それは「ディベート」とは異なり、お互い対話をする前と後で、自分たちが変わっていなければ意味がない。相手を負かすことが対話なのではなくて、自分たちがその対話の中で新しいことを発見し、それを実践することができて、初めて対話の意味があるのです。

——先生は「大学はジャングルだ」とおっしゃっています。基礎科学か

らイノベーションの創出まで、京都大学に課される期待はとても大きいですが、どのような舵取りをされているのでしょうか。

イノベーションはそもそも基礎研究力を鍛えなければ出て来ないものです。近年、日本の研究力が落ち込んでいると言われるのは、基礎研究を軽視したためです。これは産業界も気づき始めている。世界を追い越すためには、世界と違うことをやらなければダメなのです。それはまさに、世界を変えたスティーブ・ジョブズが実現したことであって、同じことを考えて競争していても、圧倒的な資金力だとか人材力を誇る国や企業には負けるわけです。

だから、オンリーワンから始めなければならない。オンリーワンがいずれはナンバーワンになるという発想で取り組むわけです。でも、オンリーワンを究めるためには、基礎研究の中で「おもろい発想」をどんどん導き出していかないといけない。

ＡＩ（人工知能）だって、今は第4世代が出て来ているけれど、最初の頃は失敗したんですね。社会から完全に無視をされて、その頃のＡＩ研究者は「いったいこんなことをやって何になるのだろう」と悩んだわけですよ。ところがいつかそれが世界の主流になって、世界を変えることになった。

そういう力と伝統は日本にもあったのに、世界に追随するという路線を選択してしまったがゆえに、日本の産業界も研究界も最近落ち込んでいるのではないか。ですからもっと、普通の人とは違う発想をする学生や若い研究者を育てなければ、日本の未来はないと思っています。

京大伝統の〝新しい哲学〟で「人間中心主義」を捉え直す

――京都大学は2022年に迎える創立125周年に向けて、「京大力、新輝点。」というスローガンのもとさまざまな施策を打ち出されています。一つは「地球」。プラネタリー・バウンダリー（地球の限界）の9つの限界点のうち4つが超えていると言われる今、SDGsの未来にどう立ち向かうか。もう一つは「文化」で、「人社未来形発信ユニット」を結成されました。

いま、私は毎週「総合科学技術・イノベーション会議」（議長・安倍晋三首相）に関係機関の長として出席しています。これは科学技術の進展を目指した内閣府の、いわば司令塔と言えるものです。

最近では政府も産業界も、科学技術の発展には人文社会科学系の学問が必要ではないかと見直しが進んでいます。とりわけ政府が主導している「Society 5.0」は人間を中心とした超スマート社会の実現であり、人間と社会が含まれている。人文社会科学系の学問が伴わなければ新しい世界は生まれない。ですから、こうした学問をどんどん取り入れていこうという話になっています。

しかも、2017年に指定国立大学に指定された京都大学は、文部科学省から人文社会系の学問も牽引してほしいという特別なミッションを受けています。ですから、京都大学はそれ以来「人文・社会科学の未来形の発信」と称して、新しい学問の構築に取り組んでいます。その一環が、まさに西田哲学のように東洋思想を見直しながら、西洋近代科学にはない発想を未来に向けて発信していくということです。

――西田哲学とは、日本を代表する哲学者で京都学派の創始者、西田幾多郎（1870-1945）の構築した思想体系のことですね。

昨年パリで、フランスの国立社会科学高等研究院とシンポジウムを行いました。その共通テーマが「自然は考えるのか？」です。京都大学が誇る西田幾多郎やわが国の霊長類研究の創始者・今西錦司、哲学者・和辻哲郎らの研究者であるオギュスタン・ベルク氏をはじめ、フランスの社会科学系、自然科学系の学者、そして京大の研究者が集まって、これからの自然の見直し方をどうすればよいかを話し合いました。

西洋近代科学というのは、自然を客体として明確に分離して、人間は自然をコントロールするという発想で歩んできたわけですね。その手法の中に近代的な科学技術が発生したわけでしょう。しかし、西田は主体と客体を明確に分離せずに、人間というものも自然や物理的な環境の中に含まれると考えた。それが日本的な情緒であり、東洋的な考え方であると謳ったのですね。

今、そういう考え方をしていかないと、地球は人間によってどんどん滅ぼされていく。人間は人間に快適な環境を作ってきましたが、実はその人工的な環境によって人間が苦しめられている。地球も苦しめられているというのが現状なのです。21世紀以降のことを考えるならば発想を変えなければならず、だから日本の哲学に基づいた科学が必要だと。

――その新しい知の構築に、京都大学が貢献する。

哲学はこれまで世界を解釈する方法、そして人間の生きる意味を探し続けてきました。しかし、その哲学は20世紀には生物学に乗り越えられた。つまり、人間というのはＤＮＡのアルゴリズムによってできている他の生物と変わらない存在であるということを、生物学が喝破したわけでしょう。

21世紀は、それがさらに情報学によって乗り越えられる時代です。人間はこの世界を構成するすべてのものと同じように、情報によって作られている。いわば情報の集積です。だから、その情報さえきちんと理解してしまえば新しい生命を作ることはできるし、すでに人間は遺伝子編集や遺伝子組み換えによってそれを行っている。人間さえも作り替えることができるという話になってきた。それが「ＡＩに超依存した未来」の社会。でも、それはユートピアではなくて、ディストピア（暗黒世界）です。

そのことをはっきりと意識しながら、私たちは人間中心の「スマート社会」を作っていかなければならない。京大は自然科学の最先端を走っていますが、同時に哲学や思想といった分野でも世界に発信していこうと思っています。

――「人間中心主義」に対しては批判的な見方もあるようですが。

それは用語的な定義が違うのです。例えば生態学や動物学などの立場からすると、人間は自然界の中の一つの種に過ぎず、人間だけが特別な存在ではない。ところが、ＡＩだとかＩＣＴの世界では、人間中心でなければならない。つまり、機械や情報によって世界が作られるのではなくて、人間がＡＩを使う立場にならなければならない。その意味で「人間中心」と言っているわけです。

――確かに高度情報社会の中で人間中心でないと、先程のディストピアになってしまいますね。逆に自然環境などを考えると、人間中心だと今日のプラスティックごみなどの問題に繋がってきます。

そうそう、だから地球上で人間が安全に活動することのできる限界を示した「プラネタリー・バウンダリー」の9つの境界のうち、4つがすでに限界値を超えているわけでしょう。それは人間中心の科学技術を多用してきたゆえなんですね。

生物多様性が壊れ、それからリンや窒素の循環もおかしくなった。これはやはり人間が自然の中にきちんと溶け込めない人工物を作りあげてきた結果だと言えます。

京都大学の基本理念である「地球社会の調和ある共存」は今日、まさに必須の課題となっています。そのために、「京大力」に加えて新しい技術やコンセプトで、いかに果敢に立ち向かっていくべきかが試されていると思います。

――ありがとうございました。

山極　壽一先生
（やまぎわ・じゅいち）

1952年東京都生まれ。理学博士。人類学者、霊長類学者。75年京都大学理学部卒。77年京都大学大学院理学研究科修士課程修了。80年同大学院理学研究科博士後期課程退学。80年日本学術振興会奨励研究員。83年財団法人日本モンキーセンターリサーチフェロー。2002年京都大学大学院理学研究科教授。11年同大学院理学研究科長・理学部長。12年京都大学経営協議会委員。14年第26代京都大学総長。17年日本学術会議会長、17年6月～19年6月国立大学協会会長。